自主シンポジウム 2

子育ての「支援と連携」をめぐる

企画者・司会・指定討論者 岩田純一（京都教育大学）
 高濱裕子（椋山女学園大学）
 寺崎敦子（小児科医）
 村田喬子（京都市教育相談総合センター）
 鍋島恵美（京都教育大学付属幼稚園）

【企画の趣旨】

近年、子育てにおける支援と連携が声高に唱えられ、保育の現場においてもさまざまな取り組みが行われている。しかし、どのような「連携」や「支援」がなされるべきかをめぐっては議論のなされる場所である。そのような現状をみると、「連携」や「支援」といった概念のなかみを今日的な視点に立って整理し、捉え直して見る必要に迫られているのではなかろうか。そこで本シンポジウムでは、保育を研究する発達心理学者、子どもと親の抱える問題に身近な小児科医、子育て支援にたずさわるカウンセラー、保育実践の場にいる幼稚園教師といった、それぞれ異なる立場からみた子育ての「連携」や「支援」に関する話題を提供してもらい、保育における連携や支援の意味をもう一度問い直そうとするものである。

子どもと親の成長を支える「連携と支援」

高濱裕子（椋山女学園大学）

子どもの問題の原因を追究することは“連携”か？ 幼稚園教諭として、保育所・幼稚園と小学校との連絡会に出席したことがある。小学校側は、新入生が学校生活に適應するにはいかなる能力が必要か、それを育てるためにはどのような活動が望ましいかを次々に指摘した。一方、保育所や幼稚園の関係者は（学校教育とは異なる）保育の特徴を十分に説明することができなかった。

親は指導が必要な存在か？ 子どもは、親や保育者を含む大勢の大人との関わりによって成長する。したがって、立場の異なる大人は協力し合うことが求められる。しばしば保育者は、子どものために思って親に助言する。この時、何らかの指導が必要な存在として親が認知されてはいないだろうか。助言を受ける親の中には「自分には何が足りないのだ」「親として未熟なのだ」と落ち込む人も少なくないだろう。

親の視点から捉えた支援とは？ ある研究プロジェクトに関わり、母親の話を繰り返し聞いたことがある。唯一心がけたのは、評価的な助言を控えることであつた。

この研究を通して、母親たちの考えや悩みに初めて気づいたといっても過言ではない。子育てに関する悩みや

問題を相談したいところとして、親は保育所や幼稚園を選ぶ。では、親は必要な時に必要な援助を選ぶことができるのだろうか。

保育者が「連携と支援」に果たす役割とは？ 一方、保育者は相手が求める援助を、求められるような形で提供しているのであろうか。いくつかの観点に沿って見直してみたい（例：大人と子どもの関係モデルを示す、発達に応じた遊びを援助するなど）。乳幼児期に何を育てたいのかを、私たちは一般論ではなく、ひとりひとり具体的に親に説明できるだけの力量をもつことが求められているのではなかろうか。

保育者を支える「連携と支援」

村田喬子（京都市子育て支援総合センター）

子どもや親の姿がみえにくい

「母親は変わったかー若い世代のお母さんー」という調査レポートによると、47%の母親があまり子どもを好きではないと答え、自分をあまり母性的でないという人が44%に達している。育児不安の強い母親は、家事や育児に負担感が強く、自分の時間や友人と過ごす時間を多く欲しがっている。「子どもだけを生きがいと生きた生き方」に共感できない人も多くなり、子どもをもつことを「人生のリスク」と考える人さえ出てきている。一方、アスペルガー症候群、自閉症、ADHDなど診断を要する症状を抱えた子どもが増え、これまでの経験では対応できないような言動に驚きや戸惑いが広がっている。

子どもの育ちを支える枠組みを広げる

保育者は日常的に3～5歳の子どもと接している。3歳児との比較で自然に「もう5歳だから」という捉え方が強くなっていく傾向がある。しかし「まだ5歳」という捉え方の両方を意識することで、保育にゆとりが生まれる。「就学までに」という線引きをしないで、連続した成長のプロセスとして捉えると発達課題がクリアになってくる。

親の子育て観の多様性を理解する

時代の急速な変化の中で、若い母親の意識とライフスタイルが変化している。育児情報過多に翻弄され、神経

質なほどに過干渉な母親。子育てのために自由度が大きく狭められフラストレーションを抱えている母親。保育者が子どもの側からの要求や、望ましい母親像を求めると、親とは対立関係になり伝わりにくいことになる。

保育者を支援する連携のあり方

子どもや親への対応は、園内研修だけではより良い方法が見つかりにくい現状である。大学の研究者、保健所や児童福祉センターの職員、小児科医、カウンセラーなどと連携し、子どもや親の言動の意味を共有し話し合うことが必要である。このことが日々の保育実践に充実感と達成感を生み出し、親への支援の原動力になっていくのではないだろうか。

育児支援と小児科医の関わり方

寺崎敦子（小児科医）

小児科を開業して約十年が経過するが、母親と子どもの関係、母親の育児に対する考え方は大きく変わってきたように思う。「子育て」とは、まず子どもを保護して育てることであり、次にいずれ親から離れ一人立ちして社会生活を行うために必要な知識や技能を身につけさせることである。この「子育て」が以前は生活の一部としてごく自然に行われてきたのだが、科学的なこと・効率的なことが最優先される現代社会においては、「子育て」はすぐには結果の出ない、非効率的でシンドイものとして受けとめられているような感さえある。

「子育て」を複雑なもの、シンドイものに変えてしまった要因はいくつかあるだろうが、その一つに“情報過多”があり、その多すぎる情報の中でどれが必要で、どれが必要でないのか、あるいは間違った情報なのかを適切に教えてくれる良きアドバイザーが少ないということがあげられる。そのために、得られた情報がそのまま育児不安へとつながってしまうのである。核家族化が進み、身近な相談相手がなくなった今こそ、小児科医は育児不安を抱えた親のアドバイザーとして、母親が「子育て」に対する自信と喜びを感じることができるよう、支援していかねばならないと考えている。

小児科医は、子どもの病気といういわば「ストレス」をかかえた状態で初めて母と子に出会うわけだが、いくつかの病気を経験しながら、子どもと共に親も育っていくという場面に遭遇することは多い。例えば、子どもがちょっと鼻水をたらすたびにごとに受診していた母親が、いつの間にか「診てもらわなければならないときに診てもらい、あとは家で様子を見ればよい」ということを体得し少しずつ自信をつけていく。今までに出会った何組かの親子の話をしなが、小児科医としてよりよい育児支援の方法を

さぐっていきたいと考えている。

保育の遊びのなかにある「連携と支援」

鍋島恵美（京都教育大学付属幼稚園）

今日、保育実践の場では、「連携と支援」の当事者である保護者と保育者の関係が必ずしもうまく機能しているとはいえない状況である。そこで「連携」「支援」の前提としている保護者像について、その妥当性を保育の現場から①遊びへの介入事例を通じて検討し、現実の問題を明らかにすること、②保護者を巻き込んでいった「ある遊び」の検討を通じて、そこでの保護者と保育者の新たな関係の創造から、保護者自らが気づく育ちが可能であるかどうかについて考えてみたい。

1. なぜ保護者が保育の遊びに直接介入してくるのか？

子どもの好きな遊びの一つに「ヒーローごっこ」がある。テレビやビデオで観た好きなヒーローになって闘う遊びである。ヒーローと追従者や敵の役割が、現実の仲間関係を反映することが多い。後者の立場になる子どもの母親は、遊びという認識をもてない程に不安定な心理状態になり、やがて逆転するであろう子どもの関係が待てない程にその焦燥感を募らせていく。そこに、子どもの行為を子育ての是非と結びつけたり、子どもと一体化していく母親像がみえてくる。彼女たちは、立場を超えて保育に介入するほどに育児に不安を抱いているのではなからうか。

2. この現実の保育者と、子どもをどう保育していくのか？

言葉を超えた保育者との情動・感情面でつながる体験が必要であると考え。保護者を遊びという場に巻き込むことで、我が子だけに焦点化された視点を、子どもたちとおとなが共同で織りなす保育の場に広げていく必要性を感じている。保育の遊びのなかでも「うそ・ほんど？」と、子どもが推理・想像を働かせ真実を追究するようなごっこ遊びにその体験ができる可能性があると考え。

3. 「うそ・ほんど？」遊びがなぜ有効か？

子どもが「うそ・ほんど？」と推理・想像する姿をみながら、保育者が嘘つこを嘘として貫き通す。保護者は、現実にはありえない出来事なのに我が子が真剣に悩み、その姿をおかしいけれどもいとおじいと感じ、その思いを壊すまいと嘘を嘘として突き通すことになる。この種の遊びには、保護者と保育者とが秘密を共有するという共犯者的な感情の交流が芽生え、立場を超えておとな同士として繋がる可能性がある。そのことは、保育者と保護者が共同で保育する新たな関係の創造であり、双方が育ち合う場ともなる。